

次の語群にそれぞれ関連する宗教名を記入し、その宗教の成立、あるいは成立と変遷を、下記の語をすべて用いて説明しなさい。(約 100 字程度)

バビロン捕囚・ソロモン・エジプト

津田塾大

ユダヤ教

ヘブライ人の一部はエジプトで受難の後、モーセに率いられてパレスチナに移住した。前 10 世紀、ソロモン王時代に栄華を極めた王国も分裂し、さらにバビロン捕囚などの苦難を経た後、前 6 世紀後半に教団を成立した。

出エジプトを指導したモーセとヤハウェの契約で成立した一神教に基づき、民族統合を果たしたヘブライ王国はソロモンの全盛期を経て分裂。カルデアによるバビロン捕囚後、ゾロアスター教の影響を受けて前 6 世紀後半にユダヤ教を確立

ユダヤ民族の歴史とユダヤ教の特色について、以下の 5 つの語句を用いて説明せよ。なお、これらの語句を使用した箇所には下線を引くこと。(300 字以内)

出エジプト ペリシテ人 ユダ王国 アッシリア アケメネス朝

パレスチナからエジプトに移ったセム系ヘブライ人は、前 13 世紀にモーセに率いられて「出エジプトを行い、パレスチナに帰還してペリシテ人と抗争しつつヘブライ王国を建国した。ヘブライ王国は 10 世紀にはエルサレムを都とし、ダヴィデ王とソロモン王の下で全盛期を迎えたが、ソロモン王の死後南北に分裂し、北のイスラエル王国は前 8 世紀にアッシリアに、南のユダ王国は前 6 世紀に新バビロニアに滅ぼされた。この時バビロン捕囚で連行されたユダヤ人は、その後アケメネス朝によって解放されたが、この間に民族の歴史とゾロアスター教の影響を背景に、偶像崇拜を否定する唯一神信仰と選民思想、メシア思想を特色とするユダヤ教が形成された。

紀元前 17 世紀から紀元前 12 世紀にかけてのエジプトとシリア地方との関係について、以下の語句を用いて述べなさい。400 字以内で解答し、指定された語句には下線を施しなさい。

テル＝エル＝アマルナ

戦車と馬

アメンホテプ4世

「海の民」 ヒクソス

前 17 世紀にエジプト中王国は、シリア方面から戦車と馬をもって侵入してきたヒクソスによって征服された。しかし前 16 世紀に新王国がおこってヒクソスを撃退し、さらにシリア方面にまで進出した。前 14 世紀、アメンホテプ4世は従来のアモン＝ラーを主神とする多神教を禁じてアトーン神の信仰を強制し、都をテーベからテル＝エル＝アマルナに移した。彼は自らの名前をイクナートンと改め、王妃ネフェルティティは王の改革を支持した。この時期に、エジプトと北の諸国、ヒッタイト、ミタンニ、アッシリア、バビロニアなどとの間に交易が盛んに行われた。改革は王の死によって終わったが、エジプトには珍しい写実的なアマルナ美術を生んだ。前 13 世紀末から前 12 世紀初めにかけて地中海方面より攻撃してきた「海の民」により、シリア地方を支配していたヒッタイト、エジプトの勢力が後退し、セム系のアラム人、フェニキア人、ヘブライ人の活動が活発化した。

今日、南アジアと呼ばれる広大な地域には、系統を異にするさまざまな人々が居住していた。この地域において、インド世界として特有の社会・宗教・文化体系の生成が始まったのは、たかだか最近 3500 年ほどのことである。こうして出現したインド古代の社会・宗教・文化体系とはどのようなものであり、それらはどのような過程を経て形成されたのかを説明しなさい。その際、下記の語句を必ず使用し、その語句に下線を引きなさい。(200 字以内)

セルジューク朝、モンゴル帝国、オスマン朝は、ともにトルコ系ないしモンゴル系の軍事集団が中核となって形成された国家であり、かつ事情と程度は異なるものの、いずれも西アジアおよびイスラームと深くかかわった。この3つの政権それぞれのイスラームに対する姿勢や対応のあり方について、相互の違いに注意しつつ 300 字以内で述べよ。句読点も字数に含めよ。

セルジューク朝は遊牧民として中央アジアから起こり、1055 年にブワイフ朝を滅ぼしてバクダードに進出し、君主は「スルタン」の称号を得て、西アジア一帯を支配しイスラームの政治的地位を確立した。1206 年チンギス＝ハン建国によるモンゴル帝国は、広大な領土を維持するため宗教には寛大であった。四つのハン国に分裂した後イランを支配したイル＝ハン国のガザン＝ハンはイスラーム教を国教とした。

13 世紀末小アジアに起こったオスマン朝は 1453 年ビザンツ帝国を滅ぼし、シリア・エジプトをあわせ、16 世紀初頭、マムルーク朝を倒しメッカとメディナの保護権を得て、イスラーム世界における指導的立場に立った。

広大なイスラーム世界は、10 世紀におけるアッバース朝の衰退以降、イスラーム諸王朝が分立する時代に入る。しかし、ヨーロッパ史で大航海時代といわれる 16 世紀には、三つの強大な王朝が鼎立する時代を迎えた。この三つの王朝の崩壊過程から、イスラーム世界の近代は生まれる。その一つは、イスタンブルを首都とするオスマン朝であるが、あとの二つの王朝は何か。その名前を述べ、それぞれの王朝の成立経緯(いつ、誰によって建設され、どの地域を、どのような理念で統治したのか、など)を簡潔に述べなさい。(200 字以内)

一つはサファヴィー朝で、1501 年にイスマーイール 1 世によって創建されイランを支配した。この王朝はシーア派を国教としてスンナ派のオスマン朝に対抗するとともに、伝統的なシャーの称号を用いてイラン人の民族意識を高揚させた。

もう一つはバーブルが建設し北インドを支配した王朝で、彼がティムールとチンギス＝ハンの血縁でもあったことからムガル朝と称された。この王朝の君主もスルタンではなく、皇帝の称号を用いた。

東南アジアは、その一部に含まれるインドシナという地域名に象徴されるように、インド・西アジアと中国とを結びつける位置にある。この地域は大陸部と島嶼部に大きく分けられるが、そこには地理的条件を反映した歴史的・文化的な相違があり、それが現在の国家のあり方にも影響を及ぼしている。11 世紀以降に現在の東南アジアにおける宗教分布につながっていく動きが見られる。その動きについて、以下の語句をすべて用いて、120 字以内で記しなさい。使用した語句には、下線を引くこと。

大陸部、 島嶼部、 スリランカ、 マラッカ王国、
大乘仏教、 上座部仏教 首都大東京

大陸部では 11 世紀にビルマでパガン朝が起こり、スリランカとの交流で上座部仏教が広まって、モンゴルに押されて南下したタイ人にも影響を与えた。島嶼部では大乘仏教やヒンドゥー教が中心だったが、15 世紀以後マラッカ王国によりイスラームが広まった。

東南アジア地域を経由する海路による東西交流・交易は、紀元前後から盛んにおこなわれるようになった。紀元前後から 5 世紀ごろにかけての東南アジア地域は東西交流・交易にどのように関わっており、またそれからどのような影響を受けていたと考えられるか。以下の語を参考にしながら 350 字以内で説明しなさい。(解答の文中にこれらの語を使ってよいが、すべてを使う必要はない。)

日南郡 林邑 扶南 オケオ インド ローマ

東南アジアでは海の道の寄港地としての港市国家が発展した。1 世紀頃にメコンデルタに成立した扶

南の港オケオからはローマの金貨や漢代の鏡が出土していることや、2世紀半ばに大秦王安敦(ローマ皇帝マルクス=アウレリウス=アントニヌス)の使者と称する者が武帝によってベトナムに設置された日南郡に到着したことから、中国とローマが海の道で結ばれていたことがわかる。またローマとインド間で季節風貿易が行われていたことは『エリュトウラー海案内記』に記されている。その後ベトナム南部には林邑が成立するが、中国南朝時代には扶南や林邑から熱帯物産が中国に輸出された。ベトナムには漢字や儒教などの中国文化が伝わったが、他方でサンスクリット語、ヒンドゥー教、仏教などのインド文明が東南アジアに伝わり、中国・インド文明の受容が進んだ。

アヘン戦争の敗北と太平天国による動乱を経た清朝はさまざまな近代化政策をとらざるを得なくなった。この動きのなかで戊戌の変法はどのような位置を占めているのか、日露戦争の前後までを視野におさめ 300 字以内で述べよ。

1860 年代からの洋務運動は、軍需工業中心の産業諸部門における西洋技術を利用することに終始し、西洋思想や社会制度の導入は実現できず、清仏戦争・日清戦争と敗北して完全に破綻した。この反省から康有為らが提唱し光緒帝に認められて実施されたのが、立憲君主政体の樹立を目指す戊戌の変法である。この政治改革は保守派の反撃で挫折したが、その主張は義和団事件後に清朝が行った科挙廃止(1905)を含む官制・教育制度の改革によって具体化され、1908 年には明治憲法を模範とする憲法大綱も宣布された。しかし、この間に革命派が台頭し、1905 年孫文は東京で中国同盟会を結成した。彼は三民主義を掲げて清朝打倒と共和政樹立を主張した。

次の問について、400 字以内で解答しなさい。

19 世紀末から 20 世紀前半までの朝鮮半島をめぐる歴史の展開について、国際関係にも留意しつつ、以下の語句を用いて説明しなさい。 三・一運動 下関条約 大韓帝国 義兵闘争 ポーツマス条約

1894 年に朝鮮半島での主導権を巡って日清戦争が勃発した。翌 1895 年に締結された下関条約により清朝は朝鮮への干渉権を放棄した。これを受けて朝鮮国王は 1897 年に国名を大韓帝国と改称し、自主独立の国であることを内外に示した。しかし日清戦争後は朝鮮と中国東北地方の支配をめぐる日本とロシアとの間で対立が激化してしまった。これにより 1904 年に日露戦争が勃発した。その講和条約が 1905 年にアメリカにおいて調印されたポーツマス条約である。これによりロシアは韓国に対する日本の保護権を認めた。日本は朝鮮半島への支配を強化し、義兵闘争という朝鮮民衆による激しい抵抗を受けたものの、1910 年には韓国併合を断行した。第一次世界大戦後にパリで開催された講和会議において民族自決が唱えられると、これに触発されて朝鮮の独立を求める民衆運動が活発化した。これが三・一運動であるが、日本側官憲による徹底した弾圧を受けることになった。

内外の圧力で崩壊の危機に瀕していた、近代のオスマン帝国や成立初期のトルコ共和国では、どのような人々を結集して統合を維持するかという問題が重要であった。歴代の指導者たちは、それぞれ異なる理念にもとづいて特定の人々を糾合することで、国家の解体を食い止めようとした。オスマン帝国の大宰相ミドハト=パシャ、皇帝アブデュルハミト 2 世、統一と進歩委員会(もしくは、統一と進歩団)、そしてトルコ共和国初代大統領ムスタファ=ケマルが、いかにして国家の統合を図ったかを、時系列に沿って 300 字以内で説明せよ。 京大

多民族・多宗教のオスマン帝国で国家統合をはかるには、均質な国民の創出が必要である。ミドハト=パシャが制定した憲法では、帝国内居住者は宗教・宗派にかかわらずオスマン人として平等な存在とされた。しかしアブデュル=ハミト 2 世は露土戦争を口実に憲法を停止し専制政治をしいたが、パン=イスラーム主義を利用して広くムスリムの支持を得ようとした。統一と進歩委員会による革命

政権は憲法を復活したが、パン＝トルコ主義を唱えてトルコ民族主義を強調した。第一次大戦後に登場したムスタファ＝ケマルはスルタン制を廃止して、共和国を樹立し脱イスラーム化を進め、政教分離、女性解放などの改革を推進して、西洋型国民国家の樹立を目指した。

東南アジアでは、島嶼部においては 18 世紀までにすでに、西洋諸国がかなりの影響力を及ぼすようになっていたが、19 世紀になると、大陸部も含めて、西洋諸国による東南アジアの植民地化が進められていった。19 世紀の東南アジア大陸部・マレー半島におけるイギリスとフランスの動きについて、以下の語を参考にしながら 350 字以内で説明しなさい(必ずしも、それらのすべてを用いる必要はない)。

海峡植民地	マレー連合州(マラヤ連邦, 連合マレー諸州)
ビルマ戦争(イギリス＝ビルマ戦争)	インド帝国
清仏戦争	フランス領インドシナ連邦

イギリスはペナン、マラッカ、シンガポールを併せて、1826 年に海峡植民地を形成した。19 世紀末にはマレー半島南部を支配し、マレー連合州を成立させ、ゴムのプランテーションや錫の採掘を行った。さらに 3 度のビルマ戦争でコンバウン朝を滅ぼし、ビルマをインド帝国に併合した。フランスはナポレオン 3 世の時代に仏越戦争をおこしてベトナムとサイゴン条約を結び、コーチシナ東部を獲得した。その後カンボジアを保護国化したが、ベトナムとユエ条約を結んでこれを保護国化した。これに対して清が宗主権を主張したため清仏戦争が勃発したが、フランスは天津条約で清の宗主権を放棄させ、ベトナムとカンボジアを併せて、フランス領インドシナ連邦を成立させ、後にラオスも併合した。タイは英仏両植民地の緩衝地帯として独立を維持できた。